
異世界での冒険譚

翔太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界での冒険譚

【Nコード】

N0697Z

【作者名】

翔太

【あらすじ】

ある日主人公はさっきまでいたはずの世界での死を迎え、神とと呼ばれる存在に転生させられ新しい世界で生きていくことになりました。そのときに主人公は能力をもらいます、そしてその能力を使って主人公は新たな世界で強く生きていきます。

プロローグ 転生（前書き）

初めてこういうのを書きますので、誤字脱字等は多めに見てください。
い。

プロローグ 転生

ある日俺は知らない部屋にいた。

「・・・うん？ここはどこだろう？」

俺は周りを見渡すがそこはあたり一面が真っ白で何も無い部屋だった。

しばらく歩いてみるが突き当たりといったものは存在せず壁に当たるといふことはなかった。

10分ぐらい歩いただろうかいきなり目の前に爽やかな青年が現れた。

「やあ、こんにちわ」

青年は軽々しくそう言ってきた。俺は警戒しながらもその青年にさつきから気になっていたことを聞いてみる。

「ここはいつたいどこですか？」

青年はやれやれといった風に首を横に振り俺に聞かれたことを説明する。

「せっかく挨拶したのに・・・まあいいや、ここは死後の世界さ、

君はさつき死んだんだ」

俺はさつきまで何をしていたか記憶を遡ってみる。たしか夜空の星を見ながら散歩していたはずだ。その後家に戻る前に何かあったんだが記憶が飛んでいた。いつたいどういう風に死んだんだろう？聞いてみることにした。

「俺はどうやって死んだのですか？」

「君は帰宅途中に女性が指名手配中の殺人犯に襲われているのを見して無謀にも素手で挑んでいったみたいだね、そして殺人犯が持っていた鉈で一瞬で首を落とされ死んだみたいだね」

俺は気を落としたが、襲われていた女性のことが気になったので聞いてみた。

「それで、女性は？」

「犯人が君を標的にしているときに隙を突いて逃げたみたいだね。犯人は女性が通報して今は警察に逮捕されたみたいだよ」

「そうかよかった・・・」

俺は安心してのしか表情を和らげほつと息を吐く。そして心配事が尽きてふと気がついたことを言ってみる。

「そういえばあなたいつたいは誰ですか？」

青年は俺の言葉に待ってましたとばかりに答える。

「私か、私は神だ。まあこの部屋の管理人といったところかな？君が死んだから仕事で君を異世界に転生させなきゃいけないんだ」

俺は神と名乗る青年に興味なさげにそうですかといつて話を聞くことにした。

神がいうには俺は生前かなりの数の善行をしたので異世界に転生させるにあたり色々能力をくれるのだそうだ。

「能力か・・・どんなのもいいですか？」

「君が思いつくのを言ってみよう」

俺はしばらく考えたのち良さそうなものを選びいってみた。

「ならあらゆる概念を持ったものを創る能力と人や物のステータスを見れる能力が欲しいです」

神は俺が言ったことを少し考えた後

「分かった、他にはあるか？」

と聞いてきたので俺は

「特にはないです」

と返したので神は

「それだけでいいのかい、まあ後はこちらでサービスしとくよ！」
といい振り返る。

「じゃあこれから新しい人生の始まりだ、いってらっしゃい」

そういうと目の前が真っ暗になって俺は気を失った。

プロローグ 転生（後書き）

書きながら考えてたらずごくおかしく？なりました。これから徐々に慣れていくつもりなのでよろしくお願いします。

第一話 覚醒と現状把握

気がつくとも俺は知らない世界にいた。

この世界での名前はルーク・カイゼルブルクという。

先ほど急に記憶が蘇ったのである。

この世界での俺の立ち位置は母親のマリアと父親のセインの一人息子らしい。

記憶が蘇ってから俺は鏡の前で能力の確認をしているこの場合の能力とはステータスを見る能力のことだ。神が自分のステータスも見れるようにしたらしく、それを使い自分のステータスを確認している。ステータスには筋力や俊敏などといったものとスキルに分かれていることも分かった。意識すると切り替わるみたいだ。

ステータスは自分の行動しだいで若干ながらも変化するようだ。

ステータス事態はまだ子供なので高くないが特殊技能に創造と解析というのがあった。なかなか使いがっては良さそうだ。

ところでなぜ3歳まで記憶が蘇らなかったかということ、脳が情報を処理仕切れなかったようだ。

この世界のことを調べてみるとこの世界は魔法が使えるようだ。前の世界では無かったものだから使ってみたいものだ。それとゲームでもよくあったギルドもあるらしいのでいざ行ってみよう。

両親には俺の事を少し頭のいい子供として見せている、それを利用して俺は散歩のという建て前で陰ながら修練をつんでいる。魔法に関しては使い方は分からないが魔力の最大値は瞑想などをしてあげ

ることが出来るようだ。身体的な能力は若い頃にやり過ぎると後ほど成長が悪くなりそうだからほどよくやった。

俺が今いるところは父が村長のがケルティア村というらしい。東には街につながる街道があり、西には遠くまで森があり、南にはそれほど高くはないが山があり、北には少し先に貿易港があつて海が広がっていた。

5歳になり、俺は自分ひとりでは前世の知識で得たことしか分からないからこの世界で生き抜くことを学ぶために村にいる大人から知恵を授かるうと思ひ、獵師であるダグラスさんの弟子になった。ダグラスさんは背が高く、顔には無精髭が生えており、体つきも猫をするためがっちりとしている。気さくで優しい人である。

ダグラスさんには火起こしや、銚や竿を使った漁、森で狩った動物の解体の仕方それと罾も使うので長時間外にいるため野営の仕方も教わっている。今日は森のほうで狩をする。

「今日もよろしくお願いします」

「おう、今日も大獵といこうや！」

「はい、お願いします。」

ダグラスさんは昔、冒険者をしておりこの村にいる医師のケイネスさんといっしょに冒険をしたらしい。

ダグラスさんと森へ入ると俺は特殊技能の解析を使い獲物を探す。この能力は距離にして100m、範囲は視界で見えるところまでで、障害物があつてもステータスは見えるみたいだ。

「ダグラスさんあつちに何かいるよ」

「お前はやっぱ目いいな」

と、いった風に一日の収穫を格段に増やしていった。

こうやって、空いた時間に技術を教えてもらうことにしている。弓や体術なども欠かさず教えてもらった。

創造の能力はばれないようにしながら創れるものと創れないものを調べたが、直接敵を仕留めることができるものは作れなかった。

第二話 出会い

ある日ダグラスさんが俺に頼みごとをしてきた。猫でとった獲物を近所の家にとどけて欲しいそうさ。

「こんにちわ、ダグラスさんに頼まれてきました」

そういつて家の扉をたたきしばらく待つと扉があいて自分と同じくらしい子供ができた。

「……」

「あの、この家の子かな？ダグラスさんに獲物を渡してこいって言われたんだけど……」

あまり反応がないので俺は子供に獲物を渡して返ることにした。

（あの子供、凄く昏い瞳をしてたな……）

俺は根暗なやつは心底嫌いだった前世での自分が幼少のところそうだったからである。

自分勝手ではあったが、あんな目をした子供がいることが許せなかった。

何が心から期待していたものに裏切られこの世に絶望……を映したような目であった。

ダグラスさんに事情を聞いてみるとその子供の親友がいきなり目の前で魔物に殺されたからだそうさ。

その子供は、ダグラスさんがなんとか命は助けることができたそうだが、心までは無理だったらしい。

ダグラスさんは俺を同世代の子供ということ、友達になってその心を救ってやって欲しいといていた。

（そんなことお願いされるまでもない、こっちからやってやる）

俺はそんな決意をして翌日また家を訪ねていった。

第二話 出会い（後書き）

少し短めです。

第三話 友達

「やあ、君に手伝ってほしいことがあるんだ、俺一人じゃ手が足りなくてね」

そういつて俺は痩せ細った少年を連れ出すことに成功した。

少年は黒い髪、瞳も黒、着ている服も黒と、黒一色であったから、少年であろうと俺は決め付けた。

(まずは第一段階・・・)

しばらく歩き、村にある広場に着いた。

「こっちなんだけど」

俺はそういつて広場の端にある花壇に近づいていった。

「ほら、ここなんだけど植えてある花がすべて倒れているんだ。この花の植え替えを手伝って欲しいんだ。」

すると少年は黙って頷き花を植え替えていった。俺はそれを横で作業しながら一方的に話しかけていった。

太陽も真上に来るころには作業も終わった。

「ふう、やっと終わったな。腹減ったな一緒に昼飯食おうぜ！」

俺はそういつと事前に用意していた弁当を取り出した。もちろん二人分である。

はじめは黙っていた少年も、暫くするとお腹がすいていたのがぐ〜とお腹を鳴らすとこちらを見て、小さく頷いた。

俺から話しかけると彼は首を縦か横に振るぐらいの反応はしてくるようになっていた。少しは仲良くなれたみたいだった。

それからはちよくちよく俺が遊びに誘うとついてきてくれる様になった。

一週間ほどたっただろうか。遊んでいると彼は何かいいたいことがあったのかふと立ち上がり、俺を真っ直ぐ見つめ。

「・・・なぜ、こんなにもよくしてくれるの？」

子供特有の高い声だった。

俺はやっと声が聞けたのでうれしさと胸がはちきれんばかりだった。

「君が悲しみに満ちた目をしていたから、俺はそんな目が嫌いなんだ」

俺の答えに彼は少し俯いていた。

「そういえば、自己紹介してなかったね、俺はルーク、ルーク・カイゼルブルク。君の名前は？」

「・・・アリシア」

「アリシアというと・・・もしかして女の子なのかい？」

「・・・そう」

「ごめん、てつきり男かとおもってたよ」

「・・・別にいい」

「じゃあ、これからもよろしく」

俺はそういうと、『彼』ではなく彼女の手を取り握手を交わした。

こうして俺と彼女は友達になったのであった。

第三話 友達（後書き）

次の投稿は少し遅くなります。

第四話 敵襲!?

「アリシア、今日は何して遊ぼうか？」

俺はそういつとアリシアを見つめ言葉を待つ。待つこと数十秒。

「・・・ルークが決めて」

「時間かけてそれ・・・、まあいいやとりあえず散歩にでも行こうか？」

待ち合わせしていた広場を出て村の中をゆっくり歩いていく。

最近のアリシアは服は前と変わらず黒一色だが、髪を少し伸ばしているらしい。体も前よりも健康そうに見えた。

「アリシアは何か将来やりたいこととかある？」

「私は・・・ルークの役に立つことがしたい。」

「あはは・・・、俺なんかの為にありがとうな」

アリシアは俯くと耳を赤くしていた。顔を上げると前と違い眩い光を宿した目で俺を見上げてくる。

「ルークのやりたいことは何？」

「俺のやりたいことね、まあ今はこれといってないかな。」

本当は冒険者になるつもりだがここはアリシアがついてくると言いかねないので黙っておくことにする。

「ルークは欲がなさすぎだよ・・・」

「アリシアにいわれるとさすがに落ち込むな」

「何それひどい・・・」

「悪い悪いちよつと言い過ぎたかな、ごめん」

そついつた雑談をしているとふと森のほうの道から少年が2、3人走ってくるのが見えた。

なんだか様子がおかしいのでアリシアをつれて近づいていった。

近くに行くと一番先頭にいた少年がかけよってきた。

「わああああ、た、たすけっ、」

「どうした？なにがあつた！」

少年から聞いたことをまとめると、森に冒険者ごっこをしに入つたら普段いるはずのない魔物が出てきて、あわてて逃げてきたらしい。

「アリシア、子供たちをつれて村の人にこのことを伝えるんだ」

「ルークはどうするの？」

「俺は森に入つて魔物を迎撃してくる。無理だとわかったら逃げるから心配するな」

俺はアリシアにそう伝えると足早に森へと入つていった。

息を潜めて進んでいくと少年から聞いていた魔物が見えてきた。

緑色の小さい人型の魔物で解析の能力で調べると名前はスモールゴブリンというらしい。

数は3体で武器らしきものはないがこのままだと村のほうに行つてしまう。

俺は近くにあつた木に触れると創造の能力を使う。

直接攻撃できるものは創れないので少し悩む。

10秒ほど経つと触れていた木は消えて木製の籠手が二つできていた。

「こんなものでいいかな」

籠手を装着してスモールゴブリンの方へ向かう。

スモールゴブリンは俺の存在に気づくと一斉に襲い掛かってきた。俺は最初の1体の突進を避けると左の籠手で殴る、するとスモールゴブリンは少しよろめき扱ける。次に2体目と3体目が同時に襲ってくる。さすがによれられないので右の籠手を前に突き出す。すると右の籠手が瞬時に盾へと変化してスモールゴブリンの攻撃を受ける。スモールゴブリンが体勢を崩したので左の籠手で殴る、すると1体目と同じように扱けていく。

「このぐらいの敵ならこんなものか、簡単に倒せそうだな」

約1分後スモールゴブリンはルークによって倒された。

倒した後もう一度解析の能力を使うとスモールゴブリンのステータスが見れるようになっていたが、気にするほどでもなかったの放っておいた。

さっき創った籠手は左は吸収の概念で敵の体力や魔力を吸収して自分の物とすることができた。右は形状変化の概念で意識することによってその形を変えることができるというものだった。

左で体力を減らして右で確実に防ぐ、体力がある程度減ると後はひたすら殴ると敵は倒せた。少しチートが入っていただろうか・・・。

「気にしても仕方ないか」

そういうと俺は村へと帰っていった。

第四話 敵襲！？（後書き）

やっと更新です。

モンスターの名前や創造の能力で出してほしいのがあればいつでもいいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0697z/>

異世界での冒険譚

2011年12月14日10時56分発行